

第二章 北海道鐵道敷設時代(上)

一、北海道開發と鐵道事業

國防上より觀たる北海道

維新前後の北海道開發

それ北海道の地たる實に我が北門の鎖鑰。一葦帶水強露に接し、又屢その壓迫を蒙りて、邊境幾度か急を告げたるは史乘に明かなるところ、されば徳川時代に於いて、憂國の志士身を挺して國難に殉じ測量警備の大任に當りたる壯烈の事績は、今なほ之を傳へて人をして感奮せしむるもの尠くない。さりながら其の時代に行はれたる北海道開發の施設は、所謂長鞭馬腹に及ばずして極めて迂、極めて遅。明治維新後に至り、始めて開拓使の置かれてより、事業漸く其の緒に就けるを觀るのである。而して土地内部の開拓に與つて最も効果あるは鐵道の敷設に外ならないのであつて、これを先にしては松本莊一郎博士、次いで平井晴二郎博士、最後に我が田邊朔郎博士の賜とすべく、この三博士は、北海道開拓上に於ける三大恩人といふも過褒でない。

二、北海道の三大恩人

松本莊一
耶博士の
功績

北海道に於いて始めて鐵道敷設に従事せし松本博士は、米人クロード氏等と協力して、明治十三年一月工を起し、同十五年十一月に至つて、小樽幌内間五十五哩を開通せしめた。それは幌内に於いて發見されたる煤田を開發して、小樽手宮港へ輸送するの必要から起つたのである。而して此の鐵道は竣工もなく開拓使の廢せられたるため、工部省に、又其の後は農商務省に、各轉屬したが、收支相償はず、明治二十一年に十五ヶ年の契約のもとに、民間に貸し下げることとなり、翌二十二年末に北海道炭鑛鐵道會社の成立を見るや、更に之を會社に拂下げることとなつた。

平井晴二
耶博士の
功績

次いで平井博士は、右の北海道炭鑛鐵道會社の事業として起された夕張炭山より室蘭に至る鐵道と、既成線の岩見驛とに聯絡する鐵道の新線路敷設工事の任務を擔當し、約百哩の鐵道は博士によりて、明治二十三年に着手せられ、同二十五年に至つて竣成したのである。併しながら以上の二鐵道は、ともに主として運炭用に供せられ、此の鐵道による土地開發は、石狩膽振の二國に限られた憾がある。以つて

大北海道の富源を拓くには其の規模餘りに狭少なる遺憾なきを得ない。果然開拓使廢止後、北海道三縣分立となり、更に合して北海道廳とし、開發事業に着目せる政府當局は、明治二十七年に及んで、全道の營養を司る大動脈たるべき鐵道線路の調査に着手した。東京帝國大學教授たる博士が、官命によつて其の調査の任務を擔當せるは、將に此の年のことである。

我が博士
の功績

博士が北
海道に於
ける前後
七閱年間
の苦心は
疏水工事
に譲らず
其の事業

博士は當時北海道廳内に設けられたる委員の一人として、鐵道敷設地の實測踏査を行つた。次いで翌明治二十八年に於いて其の幹支線圖及び調査報告を完成し、幾多の反對論に打克つて同二十九年に北海道鐵道敷設法案を議會に提出して協賛を得た。博士は愈之により勇往邁進朝野の異議と戦ひ、豫算案を確立せしめ新線起工に着手した。斯くの如くにして、博士が始めて調査を囑託せられたるより、次いで鐵道敷設部長として就任し明治三十三年其の職を去るまで、前後七閱年間の苦心は、往年の疏水大工事に比して、敢へて譲らず。其の事業の文化的意義、また兩者相伯仲せりといふべきである。たゞ疏水の起工に當つては、知己の先覺北垣國道氏の政策に長ずるあつて、其の事業に官民の後援を得易かりしに反し、北海道新鐵道線の敷設に際しては、博士自ら事業を代表して政府に對し、當路者と樽俎折

の文化的
意義また
相伯仲す

衝の勞を盡さざるを得ざりし點に、一層の艱苦を閲した。然も、これ現に博士が工學界の偉人として世界的名聲を博しつゝある半面に、其の政治的方面の手腕の非凡なるを示して後學の憬愴に堪へざらしむるものに外ならない。以下編者は次を逐うて、博士が當年の學術的、政治的奮闘の跡を叙述せねばならぬ。

三、踏査測量上の艱苦

新鐵道敷
設事業の
刻苦及び
順序

博士當年
の踏査測
量日記

博士が北海道鐵道敷設事業に對する功績並びに其の苦心は凡そ之を三段に分ち得る。即ち其の一は實地踏査及び測量設計に關し、其の二は鐵道敷設案そのものを決定するの手續上に、其の三は敷設案が議會を通過せし後、起工及び起工以後の専門學的方面に關せるものである。當年未開荒漠の森林原野は如何に博士をして文化的使命を盡さしむるに、大なる努力と犠牲とを要求せしか。編者は博士の日記を藉りて踏査測量上の刻苦の尋常ならざりし跡を偲ぶであらう。

明治二十九年八月一日、雨を犯して早朝隨行の中村屬ミ永山村驛傳の宿舎を出た。石狩から北見へ通ずる中央道路ミ名づけた一本道を馬にまかして進んで行つた。數年前に囚徒を使役して木を切り倒して作つたものであるが、通行人が稀れであるから雜草は生ひ茂つて馬

上の人の背よりも高く、恰も草葉のトンネルを潜つて行く様で、晝なほ暗く山深く人跡なき
ところでは、雨は邀しい霧雨となつて降つて来る。中村屬は路傍の大蔭の葉を取つて頭にか
ぶり、マントの代りとする。正午頃に小さい溪流を涉つたまきに岩に腰を掛けて辨當を食し
た。深山には小鳥も鳴かず、喬木に風當れば猛獸の吠えるかま疑はれ、風風ざれば天地寂し
て聲なく、朝來一人の人にも會はず、夕刻に近づいて永山村より十二里の山奥に、思はず煙の
あがるを見た。これぞ天幕三次郎自稱する面白い男が、一人住んで居る小屋掛で今宵の我
々の宿である。

三次郎は三年前に永山村から白米五升と味噌一束を携へて、石狩川の支流を遡つて、此處
まで来て、川に魚を取つて食し、蔭の葉を木の枝に掛けて天幕として夏を過ごし、昨年は貂を
二百匹も獲つて皮をはぎ、旭川へ持つていつて米と交換したこの事。本年に入つて二間四面
の木屋掛が出来、屋根も雁皮、蝦夷松の皮で葺いてあるから此の冬は此處で越せること云つて
居る。中には鍋釜、食事道具に時計もランプもある、小形な神棚までが出来て居る。細き流水の
他方には、大きな木の箱に水が入れてある、石油函のあき函の中へ木を入れて燃し石を入れ
て半分ほさを沈めて水を暖ため風呂にするこの事であるが、入浴中は中々烟むたい。尤も烟
むたいほさでなければ虫が多くて堪へられない。

三次郎は年の頃三十五六、中々能く喋べる面白い小男で、我々の馬の音を聞きつけて小屋を

出て来て、我々に向ひ「マア、この雨を冒して能く來ました、途中の山腹をたぐるところで地獄の一丁目まで一丁目に見えるところも處々にあつたでしやう、先々御無事で結構です、家は小さいが一夜を明かすには充分です、野宿さるゝよりも遙かによからん、只一挺の鉞で手造にした此の小屋は吾にまつては金殿玉樓内の爐邊には火が燃えてあり、馴れない人には煙くて耐へ難からむも、濡れた衣類を干すには便利である、米ミ味噌は澤山あれば數日滞留されても飢ゑる心配は更がない、露の葉を天幕にして二ヶ年をくらしただこを忘れぬために、自ら天幕三次郎ミ名乗つて居ります、今に見給へ、數年の後には二階建の家に作り替へ御招待申すでせう、さうぞ重ねて來て下され、此のごろ新に造つた風呂が流れの彼方に据えてあります、その天井は千萬里の高さ、あたりは草のしきだゝみ、清きは水ミ心です、マア御這入なさい、客人さの」

蠻骨天幕
三次郎ハ
相手に談
笑ス

明治二十九年は博士將に歳三十有六。才識思慮益熟して、元氣又横溢。終日人跡未踏の險路を踏破し來りて、客窻なほ日記を録し、調査書類を繕かんず餘裕や綽々。蠻骨天幕三次郎を對手に談笑するところ、不負魂の凝りたる博士の面目躍如として現はる。博士の日記には、右の外小蟲の群り飛べるためこれを防がむとてレースを被つて食をとるを常とせること、又小水のときには如何やうにも忍ぶが大便

に際しては、蟲の咬むために困却せることや、或る驛傳にては、珍客扱ひにせられて其の家に祕藏の紫蘇卷を膳に供へられ、それを口に入れたら何だかムツムツするので吐出して見ると、紫蘇卷の中味は全部小蟲で埋つて居たことなど誌されて、當時嘗苦の狀況を髣髴せしめて居る。

博士が經
験せる當
年の困苦

觀來れば、博士が當年線路調査に用ふべき一片の圖面さへなく、單に一旅客として内部を通過するだに危険なりし北海道に於いて、天險と戰つて幾度か死地に陥り、害蟲に襲はれ、饑餓に瀕しつゝ、或は雪上踏査を試み、常に露宿同様の旅寢を重ねたる如き、其の困難は到底現在開發せられたる彼の地の旅行者の夢にも察知し得ざる境地ではないか。次の記録は斯くの如き困苦の一端を盡して居るものである。

北海道で鐵道線路の雪上踏査をするに聞いては事情を知らぬ人には判りにくいこと、思ふ。北海道の様な寒地で降る雪は暖地のものと異なつて干ききつた灰の様な微細なもので風が吹けば積つたものをも吹飛ばすのは容易であるから、吹雪に出會するに見て居る間に咫尺を辨ぜなくなり今まで目前にあつた道路が見る／＼雪の山になつて進退谷まつて仕舞ふことが珍らしくないのである。此の種類の積雪が三月の末になるに強い日光熱のため、に其の表面近くが日中に融けて夜半の寒氣で結固するから雪上が自由に歩行することが

出来る様になる。此の時は水流は氷結して居るから寒氣は甚だしいが跋涉が容易である。また木葉が落ちて山河の見透しが能く出来る。草木の茂る期節になつては山野河川を通行するこゝがむつかしく又蟲害が甚だしいから寒さを忍んでも雪上に踏査をする方が便宜であるが、心配な事は目的地に達せぬ前に食物を食盡すに餓死せねばならず、途中で暴風に出會して天幕を吹飛ばされて困難する虞もある。氷結して居る川氷が割れて落込んで流されたら再び出るこゝは出来ない次第である。いくら多人數を連れていつても銘々が一升飯を喰ふ人々であるから、其の負荷を食盡す距離より遠くへは行かれぬ譯である。随つて米と味噌は相當に多量を要し之を第一とするから天幕や防寒用の獸革ケツト等の用意が不充分になり易いこゝである。毎日暗い内から出發の用意をして明かるくなるこゝ直に歩き始める筈で、午後は二時か三時には宿地を撰定して雪上で夜を明す準備に取掛るのである。

∨ (明治四十一年十月工業の大日本第四卷十一號參照)

踏査測量
の艱苦よ
り第二の
困難に面
す

斯くの如き艱苦のうち、明治二十八年七月を以つて北海道幹支線圖及び其の調査書類は博士の手にて作製せられ、産業立國の大見地よりせる北海道開發事業の歴卷は爰に成るを得た。と同時に、博士は之を施行すべき實際方面の苦心、即ち政策遂行上の困難と戦はねばならぬ時代に入つたのである。

四、鐵道敷設案の三大難關

北海道鐵道敷設案を妨ぐるもの

博士が精透なる科學的知識に依據して、所謂戰後經營の根本方針を確立し、産業立國の理想を實現せむために設計せる北海道鐵道敷設案は、愈これを實地に施行するに當つて、先づ第一の難關たりしは當年の我が帝國の議政機關であつた。第二は軍國主義のイルージョンに支配されつゝありし政府當局であり、第三のそれは戰後財界の動搖と、政商等の防害運動とであつた。博士は終始これらの難關に身を挺し、諸種の反對論の矢面に立つて、勇敢に、且つ熱心に奮戰した。

日清戰後の我が國民

日清戰爭後に於ける我が國民は、一は軍事的野心に、他は一擱千金の營利心に、比々皆我を忘れて狂趨した。而して多額の償金を擱得し得た戰後財界の一時的膨張は、國民をして自ら泡沫の如き虚業の計畫に没頭せしむる一方、三國干涉の横暴に激した民論は、また軍國主義的政治家の利用するところとなつて、國費を擧げて師團の増設と、戰艦の建造とに抛つべく餘儀なからしめた。これがために博士が艱險苦楚を凌いで調査設計せる拓殖的生産的の如きも、その外面の地味なるがために、雲烟過眼視せらるべき運命を有するは、火を睹るより明かであつた。

博士の主
張は大勢
に抗する
にあり

博士の聰明は斯かる大勢を察知するに違算あるべくもない。否、大勢が己の主張を容認するに非なるを知るが故に、博士の熱心は一層白熱化し來るのであつた。

博士は愛國の赤誠を以つて議政機關を動かすと同時に、非常の覺悟を以つて政府當局に迫つた。博士の主張は苟も新興帝國として列強と角逐するに堪へ、先進國に伍して國威を發揚する爲には、須らく生産事業の發展を計つて之を軍備と並行せしむべく、これがためには何を措きても未開の富源を拓き、年々増加し來る國家の人口をこゝに導きて、國家百年の長計に資せよといふにある。而して北海道に於ける拓殖事業は、國家が以上の大方策を遂行するの一大捷徑に外ならないのであつて、其の方法は鐵道の敷設以外にこれなしと説き去り説き來るや、博士の舌端將に火を吐くの概があつた。政府は遂に博士の議を容れて明治二十八年末より同二十九年に亘る第九議會に提案し、博士の調査線の一部たる空知、太、旭、川、間、三、十、五、哩、之が建設費金百十七萬餘圓の鐵道敷設豫算案（二ヶ年繼續事業）は可決された。なほ同議會に於いては、近衛貴族院議長の協賛を得て、同じく博士の調査に基ける北海道鐵道敷設法案は議會に提出せられ、可決確定の上、明治二十九年五月を以つて、該法案は次の如く發布の運びに至つた。

北海道鐵
道敷設法
案

北海道鐵道敷設法

(明治二十九年五月法律第九三號)

第一條 政府ハ北海道ニ必要ナル鐵道ヲ完成スル爲漸次豫定ノ線路ヲ調査シ敷設ス

第二條 北海道豫定鐵道線路ハ左ノ如シ

- 一 石狩國旭川ヨリ十勝國十勝太及釧路國厚岸ヲ經テ北見國網走ニ至ル鐵道
- 一 十勝國利別ヨリ北見國相ノ内ニ釧路國厚岸ヨリ根室國根室ニ至ル鐵道
- 一 石狩國旭川ヨリ北見國宗谷ニ至ル鐵道
- 一 石狩國雨龍原野ヨリ天鹽國増毛ニ至ル鐵道
- 一 天鹽國奈與呂ヨリ北見國網走ニ至ル鐵道
- 一 後志國小樽ヨリ渡島國函館ニ至ル鐵道

第三條 北海道鐵道工事ハ實地ノ緩急ニ應シ各線ヲ數區ニ分テ每區ノ工事ヲ繼續事業トス

第四條 北海道鐵道事業ニ要スル費用ハ公債ヲ募集シテ之ニ充ツ

但シ財政ノ都合ニ依リ他ノ歳入ヲ以テ之ニ充ツルコトヲ得三十五年二月十五日法律第六號ヲ以テ追加)

第五條 北海道鐵道公債ノ利子ハ一箇年百分ノ五以下トス

第六條 北海道鐵道公債ニ關シ本法ニ規定ナキモノハ總テ明治十九年勅令第六十六號整理公債條例ニ據ル

第七條 北海道鐵道敷設ノ費用ニ充ツル爲金參千參百萬圓ヲ限リ明治三十年度ヨリ工事ノ急緩ト財政ノ都合ヲ圖リ漸次公債ヲ募集スルコトヲ得(三十五年二月十五日法律第六號ヲ以テ改正)

第八條 政府ハ鐵道線路ヲ實測シ每區ノ工費豫算ヲ定メ帝國議會ノ協贊ヲ求ムヘシ

第九條 明治二十五年法律第四號鐵道敷設法第十四條第十五條ハ本法ニ適用ス

五、第一期線豫算案の運命

明治二十九年七月
臨時北海道鐵道敷設部技師
さなる

鐵道敷設法の發布を見るや、博士は踴躍して第一期線の設計に着手した。即ち明治二十九年七月十八日、博士は東京を發して札幌に着き、同月二十四日を以つて臨時北海道鐵道敷設部技師に轉任、二十八日より全道視察に出張し、曩に議會を通過せる空知太旭川間の施工監督を行ひ、同時に、新線敷設豫定地の實地踏査を行うて起行順序を決定した。旭川より十勝太釧路、厚岸を経て網走に至る三百十七哩、及び厚岸より根室に到る六十五哩、此の外旭川より宗谷に達する百八十哩、合計五百六十二哩、工費一千八百五十六萬餘圓の第一期の豫算案は、即ち此の時の調査を基

第一期豫
算案成る

礎として作製せられたものである。

此の年の九月二十四日、右の豫算案は政府に稟申せられ、博士は次いで東上して高島拓殖大臣、北垣次官、原北海道長官、曾根北部局長等の諸氏と種々協議を行うた。就中軍閥壓迫をうけ、軍備擴張論に傾きつゝありし大藏省との折衝最も困難を極め、幾度か議は不調に陥らむとしつゝも、遂に博士の主張は勝を制し、六ヶ年繼續事業たるべき最初の案を更正し、之を十二ヶ年繼續に延期する點に妥協點を見出し、同年十二月二十三日の鐵道會議を通過するに至つた。これにより最初の五ヶ年は毎年工費壹百萬圓づゝ、後の七ヶ年は毎年凡そ二百萬圓を政府より支出すと云ふに決定したのである。

第一の難
關を突破
するや第
二第三の
難關現は
る

谷干城の
豫算削減
論

最初の難關は右の如く、博士の銳意努力のもとに通過したが、果然此の時、第二第三の難關は續いて起つた。鐵道會議に於いて可決せる前記第一期線案が、明治三十一年第十議會に提案中、英照皇太后の崩御により一週間の休會を見、此の期間に反對論は盛んに喚起せられた。一は谷干城一流の政府豫算三千萬圓の削減論で、第一期線は之が狙上の魚たるべき運命に置かれ、而して他に自由黨の巨頭星亨等の反對運動が猛烈に起つてきた。星一派は殖民鐵道會社の設立によつて、北海道に

星亨一派
の妨害運
動

博士の一
家北海道
に移住し
同時に新
線工事起
さる

於ける鐵道全部を會社の手にて敷設せしめやうとするのであつたが、此等の反對は結局敗れて遂に博士の主張の勝利に歸したとはいへ、一時は形勢逆睹すべからざるものあつて、その間に處した博士の苦心は、蓋し尋常ではなかつたのである。然も博士は、毅然として自家の任務を確守して譲らず。即ち此の年三月二十五日令閨靜子の君と六歳の秀雄三歳の主計兩令息を携へて東京を出發し、二十八日札幌に着き臨時北海道敷設部長として部下を督勵し、事業遂行の大任に當つた。斯くの如くにして愈、空知太旭川間の新線は、當時財界の動搖による材料供給難や、勞働者の不足等豫期せざりし多くの障礙を凌ぎつゝ、博士が異常の決心のもとに起工せられたのであるが、其の後、又もや幾干ならずして、博士は最後の大難關に逢着せざるを得なかつたのである。

(3)前掲鐵道時報所載「田邊朔郎君」第十六回の一節——して其の敷設の延長豫定はどんなものであつたか云へば、最初五ヶ年即ち百萬圓宛の時は三十哩づゝ、それから後の七ヶ年即ち二百萬圓となれば、凡そ六十哩づゝ云ふことであつて、其の費用は一哩僅に三萬三千圓である。尤も其の敷地は殆ど無代價とも謂ふべき官有地を使用し、又工事は、所謂殖民鐵道風に遣るのであるから、工費の少額でよいことは當然とは云ふものゝ、併

し一哩三萬三千圓と云ふ素敵なる安上りにしたは無論當局者が前にも記したやうな事情があるにも拘はらず、是非とも建設任やうとした杯のこともあつたから、國家經濟上、極端に冗費を節減した結果であることを注意せねばならぬ。

(前掲鐵道時報所載「田邊朔郎君」第十七回の一節——君等が大藏省と種々論辯の末に出來上りたる豫算の鐵道會議で可決したものを第十議會に提出し、君は政府各委員と共に議會に出で、此案の通過を計ることゝなつたが、然るに其豫算の議事に掛つた明治三十年一月の始めに、英照皇太后の崩御せられたゝめ、一週間の休會となつた。其時にこれに對する二つの故障が出て來て大に通過の妨害となり、君等に一方ならぬ心配を生ぜしめた、其第一は例の谷干城一流の所論で即ち歳計豫算の過大を憂ひ、三千萬圓の歳出縮少を提出したがため、豫算の全部を否決、任さうな勢となつて來たことである。其次ぎは殖民鐵道會社の發起のことで、趣意は北海道鐵道の全部を會社で敷設し、且つ運轉營業任やうと云ふのであつたが、其目的は那邊にあつたかは故星亨氏が主として盡力したことを知れば、別に茲に評論する必要もあるまい。

されども此會社發起のためには、鐵道敷設法に基いて提出したる豫算に影響を及ぼすものであるから、種々の苦心を爲したは勿論であらうと察する。然るに一月三十日の主査會、同三十一日の委員會、二月十八日の本議會で、漸く衆議院は官設鐵道敷設豫算に協賛を與へることゝなつた。併し三月五日に貴族院からは谷議員の三千萬圓歳出減少論

が出たため、種々議論に花が咲き、同論に多数の賛成者さへ出来たことなれば、一層面倒らしき風向きとなつたやうに見える。なれども三月十一日に各議員の上奏案は全く否決せられたため、十六日の貴族院で愈々可決すること、はなつたものゝ、尙ほ兩院の内に協議會を開く必要もあつたりして、實際豫算の成立したのは三月十九日であつた。これは當時の議會の模様であるが此間の奔走や苦心は誰れが其衝に當つて居るか云ふに時の北海道廳長官たりし原保太郎氏は、議會開會中は常に任地に居つた、め君が専ら本省の掛員と共に盡力仕たことは云ふまでもない。

③明治三十年四月十七日付を以つて、臨時北海道鐵道敷設部長たる博士が部下に訓示せる次の一文の如き、以つて北海道開發事業に對する博士の抱負と態度とを窺ふに足るものと思ふ。

臨時北海道鐵道敷設部ノ事業モ一步ヲ進メテ今回官制モ改正セラレ分課分掌規程モ發布セラレ諸君ハ各其掛ヲ命セラレテ分擔セラル、事ニナリタルニ付テハ北海道鐵道ノ全體ニ付テ一言諸君ニ御話申スヲ必要ト考フ。

我國モ世界競争場裡ニ立チ列國ト對峙スルニ當ツテハ軍備ノ擴張ハ申ス迄モナク殖産興業ノ途ヲ發達サセネハナラス然ルニ昨年本年ノ如キハ所謂戰後經營ノ爲メニ軍備ノ擴張ニ殆ント國力ノ全部ヲ用ヒ生産的の事業ニ費スヘキ餘力ヲ有セサル次第ナレトモ軍備ノ如キ生産保護的の事業即チ生産的の事業ノ爲メニ多クノ費用ヲ費セハ費ス

北海道人の北海道を排す

ホト如何ニ財政ハ苦シクアルトモ尙ホ多クノ費用ヲ生産發達ノ事業ニ費サ、レハ一國經濟ノ基ヲ誤ルコト、ナル故ニ本年ノ如キ非常ナル財政困難ナルトキニモ關ハラス政府モ生産發達事業ノ案ヲ提出シ帝國議會モ之ニ協賛ヲ與ヘタル次第ナリ。

右生産發達事業ノ中ニ就テ最モ重大ニシテ最モ急ナルハ北海道ノ開拓臺灣ノ經營ニシテ北海道ノ開拓ハ右ニ述ヘタル如ク北海道ノ爲メニ北海道ヲ開拓スルニ非ス國家ノ爲メニ開拓スルモノニシテ國家ノ最モ急務トスル處ナリ。

北海道開拓ノ基礎タル仕事ハ交通運輸ノ途ヲ發達セシムルニアリテ其交通運輸ヲ發達セシムル事業ノ主腦タルモノハ鐵道事業ナリ、故ニ國家ハ數千萬圓ノ公債ヲ募集シ之ヲ北海道ニ入レル次第ニテ之ニ從事スル人モ亦前述ノ如クニテ如何ナル地方ノ人カ適當ナリトカ如何ナル履歷ノ人カ適當ナリトカ如何ナル種類ノ人カ適當ナリト云フガ如キ小ナル仕事ニ非ス北海道鐵道ニ從事セントスル人ハ右等ノ如何チ問フノ必要ナシ然シナカラ一旦鐵道部員トナツテ此事業ニ從事スルコト、ナリタル以上ハ鞏固ナル一致協力ヲ必要トス而シテ此一致協力ハ充分ニ出來ヘキモノナリ如何トナレハ共同ノ進歩ハ鞏固ナル一致協力ヲ造ルノ基トナル。

何ヲ共同ナル進歩ト云フカ鐵道部事業モ今ハ僅ニ三十五哩ノ工事建設中ニアレトモ五年十年ノ後ニ於テハ何百哩ノ鐵道ヲ管理シ一ケ年何百萬圓ノ經費ヲ收支シ幾千人ノ職員ヲ使役スル大ナル役所トナルモノニテ諸君ノ仕事ハ鐵道線路ノ延長ト共ニ延

ヒ諸君モ共ニ進ムヘキ前途多望ナル位置ニアリ。

然レトモ位置ノ多望ト共ニ諸君モ又少ナカラサル困難ニ出會スヘシ國家ノ爲メニ北海道開拓ノ爲メニ基トナルヘキ鐵道事業ハ困難ナシニ出來スヘキ如キ小事業ニ非ス然レトモ如何ナル困難ニ出會スルモ之ヲ打破スヘキ材料ヲ具備セリ其材料トハ何ソヤ前ニ述ヘタル處ノ一致協力ト忍耐勉勵公平無私トハ以テ此困難ヲ打破スルニ足ル。尙ホ詳細ノ事ニ就キテハ時ニ望ミ場合ニ望ミ諸君ニ御協議ヲ申スヘシ今日ハ其大體ヲ御話申タル次第ナリ。

諸君國家ノ爲メニ御盡力アランコトヲ希望ス

明治三十年四月十七日

臨時北海道鐵道敷設部長 田邊朔郎

(4)なほこれよりさき、博士が家族引纏めに就いて一言すべきことがある。それは博士が令閨令息を伴うて札幌に移住した前年、即ち明治二十九年十月二十五日であつた。博士は任地の屯田兵の參謀長たる淺田大佐へ新任の挨拶に行つたが、その時大佐は「あなたは御宅は何處ですか」と問うたので博士は「旅館の山形屋に止宿して居ます」と返事をした。すると大佐は「それはいけません、此の大事業を擔任する人が中腰では困る。家屋敷を買つて、家族をまじめ腰を据えてもらはなければ困るではありませんか」と云つたので、博士は言下に「御尤で御座りますが家屋敷は私の心を動かすに足りません。實は私は澤山

な参考書物を持つて來ました。是は私にさつて實に大切なもので大箱數個に入れて來ました。が甚だ重いものですから金庫商人の荷物かと思はれたのです。火災が恐ろしいので宿の倉庫へ特別に頼んで入れてあります」と返事をした。これには大佐も痛く感心して、博士の任務に對する用意の周到と忠實さを推稱して止まなかつたといふ。

六 井上藏相を説破す

北海道鐵道最後の
大難關に
當面す

最後の^{北海道鐵道最後の}大難關は、明治三十年九月に於ける拓殖務省の廢止、これに引續いて新事業に理解を有せし内閣の瓦解を見たことである。此の政變後成立した新内閣は、豫算緊縮主義の急先鋒井上馨を藏相に任じ、新藏相の手腕に俟つて日清戰後濫興せし民間の虚業に痛棒を與へ、放漫に放漫を重ねし財政を緊縮し、國家を倒産の危機より救はむことを期した。即ち藏相は、斷々乎として事業休止論を獅子吼し、内地の官設鐵道はいふまでもなく、一切の事業に對し大斧鉞を揮つたが、殊に北海道の如き中央政府に遠隔せる新開地の事業の如きは、何の遠慮會釋もない。彼の命令一下のもとに博士が畢生の苦心になれる鐵道網は寸斷せられ、國家百年の生産的事業は一舉微塵に破碎さるべき形勢のもとに置かれた。

井上藏相
の横紙破
り

井上藏相の横紙破りは天下に鳴つて居る。一旦云ひ出したからは決して後へ退かないのが井上一流で、其の痼癖と勢力とに朝野を通じて、誰ひとり抗し得るものはなかつた。況んや財政緊縮主義は前内閣の失政を矯むべき唯一の政策として、藏相得意の快腕を試むべき唯一のものであるをや。當時藏相の事業休止論が、何人も面を向くべからざる勢を有し居たるは想像するに難くなく、これに對して太刀打ちするは何人にとりても、殆んど己を知らざる無謀の擧であつた。時の北海道長官は古豪傑を以つて任じた故安場保和であつたが、流石の長官ですら、藏相の前に立つことは禁物の態であつた。

安場北海
道長官の
逸話

之に就いては興味ある逸話がある。安場長官は常に人に對して、生命がけの仕事をしたことのない人には「口癖のやうに云つて、其の人を凹ますを得意とした。こは彼自ら死生の境に往來せる剛愎を誇れるものたるや云ふまでもない。博士も長官のことではあり、毎度それを聞かされて苦笑して居たものである。然るに或る時、長官は鐵道工事視察に出張したが、その際博士は部下に命じて鐵道に關する種々の視察上便宜の設備をなさしめ、また或る地點には建築列車を用意せしめた。長官至るや、博士はこれを迎へて曰はく、鐵道工事にあつては、たとへ一遍の視

鐵道從業
員は常に
命がけて
ある

察といへども生命の安全は期せられない。何故なら、營業用の列車には保安組織は整つて居るが、建築列車にはそれが無く、甚だ不完全至極のものであるからである。列車通過の際に線路附近で岩を破ることもあれば、線路に自然の故障が起る場合もあつて、何人もその安全なることを保證せられないから先づ以つて左様御承知願ひたいと。博士はそれより諄々として、鐵道工事従事員の執務の常に命がけであることを説き、近く静岡の關口知事や、肥田濱五郎氏の遭難の不可抗力なりし顛末を述べた。安場長官もこれには所謂一本參られた形で、其の後は博士に對する態度は頓に改まつたといふ。

英雄善く英雄を知り、猩々よく猩々を知る。井上藏相が事業休止論の面を犯して、北海道に於ける鐵道休止の不可を論じ、折角着手せる事業を廢棄するの國家經濟に於ける一大損失たることを説明するは、當該長官として其の當然の任務なるを知るも、相手が所謂有名な癩癬である以上、長官自身此の衝に當るの決して得策ならざるを覺つて居る。彼一語、此一語。事の承認を得難きはいふまでもなく、徒に激して意外の活劇を演じ、玉石ともに碎くなきを保せずである。安場長官は是に於いて乎、藏相説伏の大任を我が田邊博士に託したのである。

博士が井
上藏相説
伏の大任

博士は快諾一番、札幌より直に東京に電馳した。一身の利害を抛つて國家の得失を念とし、一時の毀譽に惑はされずして、真理の探究に生命を捧ぐる科學者の眼中には、一閣臣の面色如何は、宛らメートルグラスの目盛を見る程の關心もない。平々然として正義の示すところを主張すれば足るのである。彼の藏相(1)にかに己が才鋒の辛辣を誇るも、博士獨特の人物鑑識眼は、彼の長所の裏に存する短所を看破して餘りあつた。これがため博士は井上藏相を相手に、其の交渉は次の如く、極めて有利に運び得たのである。

井上藏相が自分の意見を遂行しやうとするときは、先づ難問百出、一問未だ了らざるに一間續いて至るに云ふ有様で、答者をして殆んき爲すところを知らざらしめる。然も其問ふところの難事にして、其勢の峻鋭なるは、即ち藏相の特質として之に接したものの、普く知るころである。既に此勢を以て各省の事業を中止せしめたる得意満面の藏相は、芳川内務大臣と共に今大臣の官邸を訪うたる君を見るや、直ちに北海道の鐵道を中止せよ、と頭から斷案を下した。元老として癩癩持ちとして勢力比ひなき藏相の此一言に對しては何人も思はず、諾々は答へねばならぬやうになる、けれども君が北海道鐵道に於ける確信と熱心とはさう輕々に唯々たるこゝが出来るものでなかつた。見え、例の君が温厚にして然も嚴肅なる態度

を以て閣下の御命令には、素より服従せねばなりません。唯今芳川大臣から一應お話申上げよ。このこゝに就き御参考までに只一言申述べたう御座ります。この前置きをして、それから北海道鐵道の中止斷行は、國家經濟上鐵道經濟上、且つは事業上、甚だ不利益至極である。こゝをいご丁寧に説明した。するこゝ之を靜聽して居つた井上藏相は、じわ／＼と持前の癩癩を起したものと見え、不機嫌極まる顔色を以て其の獨得の數字的難問即答を始めてから三時間の長きに涉つたゆゑ、大抵のものならば、忽ち落第し、そんなこゝでは駄目だ。こゝの吡的宣告されたであらうけれども、流石は先天的に其頭腦の明快健全なる君のこゝゝ、暗記を以て兩下する難問を事もせず即答し去つたこゝは、恰も大徳の禪僧のそれの如くであつたさうである。

V 打重ねて發する難問中僅かに一事に就て、多少でも曖昧の返事でも仕やうならば、忽ち全部を破棄するに得意老練なる藏相も、斯う出られてはさうも仕方が無かつた。見え、最後に、えい、くそ、百萬圓呉れて遣ろ。怒罵一番、終に獨り北海道鐵道のみ中止を撤回した。即ち之がため同鐵道は今日まで工事の進行を繼續するこゝが出来たのである。其頃或る方面で、えい、くそ、その一言、鐵道中止の厄を免かる。こゝの談柄となつたのも、強ち故なきにあらずである。

前掲鐵道時報「田邊朔郎君」第十八回

最後の「大難關は斯くの如くにして見事に通過した。内地に於ける事業の多くが、

藏相遂に
屈し工事
頓に進捗
す

空知太旭
川間三十
六哩先づ
開業す

休止の運命を餘儀なくせられし當年に於いて、北海道鐵道事業のみは博士の人格と手腕のもとに、其の基礎を鞏うして、着々施行せらるゝ事となつた。即ち明治三十一年六月二十六日、上川線の軌條最後のスパイクは打込まれ、同年七月二十六日には空知太、旭川間三十六哩の營業開始を見、八月二十一日盛大なる開業式を旭川停車場構内に於いて舉行し、二十三日には札幌にて祝賀協賛會主催の園遊會は開かれ、拓殖事業の一大進展をこゝに記念することゝなつたのである。

①或る時博士は故井上藏相と折衝の顛末を述べて編者に語る「井上さんは頭腦の明晰な豪い方であることは云ふまでもないが、しかし私は人の恐るゝほどにも思はなかつた。何故なら、井上さんは常に手帖を持つて居ない人であつたから。如何に頭腦の善い人でも、唯己の頭腦だけで記憶し判断し處理してゆくだけのものなら恐るゝに足らぬ。限りある人の頭腦の働きにはそのうちに必ず物忘れが生じ、誤算や思ひ違ひが生じて、そこに相手方の切り込み得る隙が出来てくるものである。これに反して眞に恐るべき人は常に手帖を持つて一々人の云つたことを綿密に記帳しておく人で、その人にはどうしても所謂隙が出来ない、従つて切り込む餘地が與へられない。故井上さんはこの意味に於いて私は人のいふほど恐れなかつたのである。云々

②明治三十一年八月二十三日、札幌にて開かれた祝賀協賛會主催の園遊會には、端なくも

一場の騒動が出来た。これを傳ふることは當時の北海道鐵道敷設事業の背景の一部を髣髴せしむるものであり、又他面、博士が處世上の一見地を瞥見せしむる便宜となるであらう。――騒動は下のやうな事情から勃發した、即ち明治三十一年六月二十八日に我が國に於いて最初の政黨内閣を稱することを得る板垣聯合内閣が出来た安場長官は即刻辭職し、杉田氏が北海道廳の長官となつた、政黨員が府縣知事にも道廳の役員にも任用された。北海道に於ける當時の軍人達は政黨嫌ひの官僚氣質からこの状態を見て野人の分際で生意氣千萬だま可成り反感を持つて居る。一方に政黨員の方では、豫れて軍人から頭ごなしにやられて居る鬱憤もあつた。ところが協賛會催の園遊會席上で或る政黨員が演説をした言葉の中に、今からは吾々の天下であること云ふ意味のことを或る比喻を藉つて述べ、暗に軍人を嘲弄した。そこで痼癢持の松永師團參謀長は堪りかされたか、直に立つて演壇に進み拳を握つて破れよと計りに机を叩いて咄々數語を發した。席はしんとして水を打つた様に靜まり返つた。瞬時の沈黙、極度の緊張の後、靴音や劍鞘の相觸るゝ音も、もに軍人は一齊に席から引揚げてしまつた。此の無言の衝突をそのまゝ放置すれば事態は漸次に險惡に赴くばかりであるが、さて斯かる場合に師團と道廳との間に立つて斡旋し得る人は博士の外にはなかつたので、博士は止むなくその任に當らざるを得なかつた。然も師團側では冷靜に考へて見るを偶、鐵道開通祝賀の園遊會席上での出來事であるから、博士に對しては大いに相濟まぬと云ふので、博士の盡

力立場を諒とし其の調停を快く容れたので何もかも都合よく運び事に事なきを得たのであつた。博士が當時の事を語つた一節に「或る出来事の真相を傳へることは實にむづかしい事と思ふ。余はあの時は如何になり行くか心配であるから諸方に目を配つて居つた、參謀長が机を叩いて怒聲を發したときは怒る人々も怒られる人々も皆其の瞬間は俯向いて居つた、然るに後になつて私にあの時はどうであつた、かうであつたと説明する人があつた、此の人々は實際の事を見て居なかつたのであるが別段虚言を吐くのではなく、全く俯向いて居る其の眼中に豫想が其の時又は其の後に映じたものであらう」と。博士が事に臨んで學者的批判と考察を苟もせざる點はこの數語に盡きて居るでないか